格安片道クルーズ

前川美和

山下孝彦（七四）元校長
山下芙美子（六三）
川口亮平（七〇）元市会議員
川口妙子（六四）
井上信夫（六一）元公務員
井上圭子（六三）元公務員
佐々木時生（六二）元イタリア料理シェフ
佐々木恵（五十四）
小川健三（六〇）元美容師
小川美奈子（五十六）

日本政府は増大する高齢者の医療費と年金の支払いで国の予算が圧迫され、青息吐息になっていた。少子化も一段と進み、高齢者を支える壮年層が激減したことも大きな原因だが、大気汚染、水質汚染、食物汚染が進む環境で、子どもをなして、育てていこうとする者が減少するのは当たり前と言える。

政府が、病院通いに精を出す働かざる高齢者を何とか早く処分しようと考え付いたのが、格安高齢夫婦片道クルーズである。五十歳以上の夫婦二人が五百万円で南半球一周クルーズに参加できる企画だ。ただ、百日間の旅の三分の二ほどの旅程を終えた寄港地であるチリのイースター島で夫婦揃って安楽死を遂げるという条件がついている。もし死にきれず、日本に戻ってきたら、ペナルティーとして更に五百万円支払うことを要求される。この企画には賛否両論あったが、すでに安楽死も認められているし、そういう死に方を選ぶのも個人の自由だということで実施されることになった。本格的な施行の前に、二〇五〇年一月、格安クルーズの募集を試みたところ、定員の五〇組があっという間に集まった。

説明会に参加した夫婦は企画の意図や条件の説明を受けて、誓約書にサインをした。みんな死を覚悟しての乗船となるはずだが、どの顔も明るく輝いていた。未知なる世界クルーズを楽しみにしているようだった。誓約書にサインを終えたあとは、クルーズ会社のマネージャーからクルーズ全般の説明がなされた。

各夫婦にはバス、トイレ付きのデラックスルームが与えられた。船内にはジム、プール、カジノ、バーなどがいつでも自由に利用できる施設も備えられ、カルチャー教室のようなプログラムも用意されていて、長い旅を退屈せずに過ごせる工夫がされていた。医者と看護師も同乗し、健康管理、及び、安楽死を司ることになる。乗船

の決まりとして、ドレスコードといって、日中はカジュアルな服装でいいのだが、ディナーやパーティーなどになると、フォーマルドレスやスーツ着用が義務付けられていることを知って、一日の中で二回着替えなければならない、大変そうだと目を合わせる夫婦が多く見られた。一人が質問した。

「ドレスコードがあるということは毎日フォーマルが必要ということですね。イブニングドレスなど用意しておかないといけないのですね」

「ええ、やはり、その辺のところは守っていただいて楽しく過ごしていただきたいと思っています。船内のショップにドレス等置いておりますので、気分転換にそこでお求めいただくこともできますが、女性のお客様はワンピースとイブニングドレス、各二着ほど用意されてから、乗船していただくほうがいいと思います」

「あら、大変ね。非日常だから、仕方ないのかしらね」

「そうですね。非日常を楽しんでいただきたいですね。ご夫婦の絆、あるいは同乗された方々との交流も広げていただければ幸いです。何か個人的にご質問のある方は、この後お答えいたしますので、遠慮せずにお残りください」

五組の夫婦が質問するために残った。

一組目は山下夫妻だった。夫の孝彦は背の高い白髪の紳士で、和服を着た小柄な妻、芙美子が寄り添っている。孝彦はずばり核心を突く質問を投げかけた。

「安楽死はどんな形で行われるのですか」

「それは医師が規定の薬物を注射することによって行われます。痛みなどなく眠るように死に至る薬だということで、一般的に用いられています」

「そうですか。死体はどうなりますか」

「寄港地のひとつであるイースター島で火葬にされて、海に散骨させていただきます」

「わかりました」

二組目の川口夫妻の夫、亮平は恰幅のよい頭の禿げあがった男で、隣に立つ妻の妙子は枯れ枝のように細かった。亮平はマネージャーに睨み付けるような一瞥を投げると言った。

「バス、トイレ付きの部屋だそうだが、写真を見る限りでは、ベッドが二つあるだけじゃないか。金を出すから、もう少し広くてくつろげる部屋はないのか」

「今回のツアーは特別格安ツアーと銘打っております。五〇組のお客様には同じ作りのお部屋でお過ごしくださいますようお願いいたします」

「特別のスイートはいくらかあるんじゃないのか」

「それは今回に限ってはございません。申し訳ございません」
三組目は井上夫妻。信夫は髪を七三に分けた貧相な男で、圭子はぽっちゃりと無駄肉のついた体を派手な花模様のワンピースに包んでいた。圭子が尋ねた。
「夫婦で参加しましたけど、一人になりたい時もあるでしょ。デラックスじゃなくても一人部屋はないんですか」
「今回一人部屋はご用意できません。あくまでもご夫婦で同室でお過ごし願います。長旅ですので、正直に申し上げて、喧嘩をなさることもあるかと思いますが、一つの部屋で休まれることによって、お互い歩み寄って仲直りできるのではないでしょうか」
信夫のほうは妻への不満を口にする。
「船に乗る前から何言ってるんだ。僕と一緒にいるのが嫌なら、こんなクルーズの旅への参加、やめたらいいじゃないか」
「それはないわ。最後に世界を巡りたいんですもの」
四組目の佐々木夫妻の夫、時生は髪をオールバックにして顎鬚を少し伸ばしている。妻の恵は体のラインが出るストレッチの白いパンツをはきターコイスブルーのセーターを着て、垢抜けた化粧をしていた。時生が口を開いた。
「船にカジノがありますよね」
「はい、ございます。自由に遊んでいただけます」
「掛け金とか負けたときに払わなきゃいけない金は、いつ精算するのですか」
「今回は片道クルーズですので、カジノで取引されるお金に関しましては、すべてその都度キャッシュで行っていただきます」
「じゃ、遊ぶ金は別に持っていかないと遊べないってことですね」
「そうです」
時生は小さくため息をついた。
最後は小川夫妻。ゴマ塩頭を短く刈り込んで黒ずくめの服装のすらりとした二枚目の健三と髪をベリーショートにして青いシンプルなワンピースを身に着けた美奈子夫妻だ。健三が心配そうに尋ねた。
「もし、死にきれずに日本に帰ってきてしまったら、どうなるんですか」
「下船して一週間以内にペナルティーとして五百万円、政府に支払うことになります」
「何か例外はないのですか」
「今回は例外は一切認められないということです」
五組の夫婦は各々自分たちの質問の答えになんとか納得しながら、説明会の会場を後にした。

南半球格安世界一周クルーズは五〇組の高齢者夫婦の思いをジャパニーズドリーム号に乗せ、二〇五〇年一月一〇日に横浜港を出航した。乗船後、マネージャーの方から旅を共にするスタッフの紹介があった。医者と看護師、カルチャー教室の講師陣、後は、ナイトショーに出演するマジシャンやダンスチームの紹介もあった。カルチャースクールは各クラスとも週二回行われ、希望者は登録して参加する。その他のアミューズメント施設であるジム、カジノ、バー、映画シアターについては、二十組ずつ案内された。

ジムスペースにはバイクやウォーキングマシーンが二十台ずつびっしり並び、後のマシーン類も充実していた。スタッフがその人に適したトレーニングのプログラムを作ってくれるという説明があった。井上圭子、佐々木恵、小川美奈子が興味を示した。圭子はうれしそうに言った。

「毎日ジムで汗を流したら、体が引き締まって、素敵なイブニングを着られるようになるかもね」

恵と美奈子も口を揃えて、エクササイズを勧めた

「何もしないで食べてばかりいたら、太るしかないですものね」

「ええ、体は正直ですよ。なるべくジムにくるようにしないと」

佐々木時生が思わず美奈子に言った。

「素晴らしいプロポーションをなさってるのに、まだ鍛えるんですか」

「あらっ、どうも。スタイルをキープするのは大変ですよ、この年になったら、筋力も衰えてきますしね」

圭子は不機嫌そうに夫の信夫を睨みつけながら、鼻を鳴らした。

「夫の愛情が足りないと、女は太ってしまうものなんですよ」

時生がとりなす。

「少しぽっちゃりしているのも幸せそうでいいですよ」

船内カジノはコンパクトに作られていた。一人で遊べるものから、数人で勝負する物まで動きやすいように配置されていた。時生の目が輝いた。

「年に一度、株で儲けた金を持って、ラスベガスに行くんですよ。ギャンブルはおもしろい。勝っても負けてもワクワクしますからね。船上でも遊べるなんて最高だ」

時生の妻、恵も目を細めて言った。

「ギャンブルは人生そのものよ」

カジノに隣り合わせでバーが設けられていて、様々な種類のアルコールが楽しめるようになっていた。もちろん頼めば、各種カクテルも作ってもらえる。川口亮平は太い腹を揺らしながら、満足げにつぶやいた。

「憩いの場になりそうだ。いつでも酒が飲める」

妻の妙子は遠慮がちに言う。
「毎日お酒ばかり召し上がっては、体に悪いですよ」
「馬鹿か、おまえは。俺たちは死にに来てるんだぞ。体にいいことして、どうするんだ」
亮平は妻を一蹴して、平然としていたが、亮平の言葉は周りを白けさせた。
映画シアターは百人は入れるゆったりとしたスペースになっていた。毎日懐かしい映画の上映がある。リクエストもできる。山下夫妻が顔を見合わせて、微笑んでいる。妻の芙美子が弾む声で言った。
「あらっ。『ローマの休日』『戦争と平和』『ひまわり』が上映予定になっているわ」
孝彦が応える。
「見たい映画のリクエストもすればいい」
「そうね。『嵐が丘』『アンナ・カレーニナ』とかリクエストしようかしら」
「それがいい」
その日の夜は乗船歓迎パーティーが行われ、それぞれの夫婦はドレスアップして参加した。和服で参加したのが山下芙美子と川口妙子だけだったので、自然と二人は近づいて、立ち話をすることになった。妙子が羨ましそうに芙美子に言った。
「ご主人、お優しそうでいいですね」
「ええ、まあ優しいんでしょうね。主人は長い間高校の校長をしておりましたので、何かいつも教育されているようですよ。ご主人は恰幅がよくていらっしゃる。何をなさっていたんですか」
「市会議員をずっとやってたんです。亭主関白で、わたしのことを馬鹿にしていますわ」
「妻を自分と同等で人生のパートナーだととらえていない夫って、多いんじゃないかしら」
「そうですね。夫に尽くして四十年。わたしって夫にとって何なのかしらって時々落ち込んでしまいますわ」
「この船ではご主人にかしずくのはやめておしまいになれば？　もっと自由にご自分のお好きなように楽しむの」
「それがいいですね。最後ですもの」
芙美子は妙子を励ましつつ、クルーズの旅というゴージャスな雰囲気を漂わせている船旅に、ある意味、逃げ場のない密室に閉じ込められたような息苦しさを感じていた。
夫、孝彦は芙美子が十七歳の高校生のとき、入っていたテニスクラブの顧問だった。いわゆる熱血教師ではなく、テニスの試合のビデオを見て、客観的に分析し、それぞれの生徒の優れた点や改善すべき点を示した。生徒自身にも相手の選手の癖や弱点を探るよう促

した。生徒は素直に従い、ある程度効果をあげた。芙美子は子どもっぽいクラスメートやクラブの男子生徒より大人の男である孝彦の理知的な冷静さに惹かれた。ラブレターを何通書いただろう。孝彦からは何の返事ももらえず、芙美子に対する態度にも変化はなかった。卒業の時も心を込めて書いた最後の手紙を渡した。初めて返事をもらったのは大学の英文科に入学した五月だった。手紙には、在学中の芙美子のストレートな愛に驚き、その素直さと一途さに心を動かされたが、一生徒として対応しようと努力したことと、卒業して大学生となった今、先生としてではなく一人の男として付き合いたい旨が書かれていた。芙美子は憧れの先生と付き合えると天にも上る気持ちだった。二人は美術館巡りをしたり、奈良、京都、神戸を散策したり、テニスや野球やサッカーを観戦したりというふうに、いろいろなところに出かけては新しい発見をした。孝彦は芙美子の保護者というか、やはり先生という感じで芙美子を守り、いろいろ教えてくれたのだが、案外やきもち焼きなのも芙美子にはおかしかった。展覧会の会場で孝彦がトイレから出てきて、芙美子が若い男の人と談笑しているのを見ると、つかつかと近寄り、何も言わずいきなり芙美子の手を取り、その場から連れ去るようなこともあったのだ。付き合うにつれて、芙美子の孝彦への尊敬の念は深まると同時に時折のぞかせる弱さを支えてあげたいという気持ちも強くなり、芙美子が大学を卒業した年の五月に結婚した。

孝彦は芙美子に家庭に入ってほしいと言ったので、英語力を生かせる仕事をしたい気持ちもあったが、孝彦の希望に沿いたいと就職せずに専業主婦になった。一年後には長女、二年あけて次女が生まれ、芙美子は二人の子育てに没頭した。しかし、孝彦が五十歳で校長職につき、研修や付き合いで忙しくなり、休日も出かける日が増え、中学生になった娘たちもクラブや塾で家にいない毎日が続くと、芙美子は時間をもてあますようになった。一人ポツンと家にいることが増えたのだ。

幸い、芙美子は英文科出身なので、英語はそこそこ話せた。それを生かして通訳ガイドボランティアに申し込み、空いている時間、外国人に大阪周辺を案内することにした。結婚してからは英語に触れる機会もほとんどなかったので、ボランティアに入る前に英語の雑誌を読んだり、ＴＯＥＩＣの問題を解いたり、大阪にある名所の説明を英語で書いたりと準備をしていたのだが、実際その場に立ってみると、なかなかスムーズに単語が出てこなくて四苦八苦した。何回か案内するうちに説明するポイントも絞れて、言葉に詰まることもなくなった。結婚以来ずっと家庭に納まっていた芙美子にとって、ボランティアのガイドは社会とのつながりが復活したようでうれしかったし、やりがいもあった。このとき、芙美子は四十歳にな

っていたが、童顔で小柄でほっそりしていたので、まだ三十前後に見られることが多かった。

ガイドをしたグループのなかに、最近日本に来て英会話の講師をし始めたグレンがいた。ツアーが終わって解散した後で、グレンが近づいてきて芙美子のメイルアドレスを聞いた。日本に来てまだ間がなくて頼る人もいないから、何か困ったことがあったら相談に乗ってほしいというのだ。芙美子は一瞬迷ったが、外国で心細いであろうグレンのことを慮って、結局アドレスを教えた。

すると、翌日早速メイルが送られてきた。電気製品を揃えたいが、一緒に見に行ってくれないかというものだった。芙美子は掃除、洗濯を終え、一息ついていたところだったので、二人で大型電気店に行って、電子レンジ、トースター、小型の冷蔵庫などを見繕ってあげた。昼食はイタリアンレストランでごちそうしてもらった。グレンは芙美子の英語力を褒め、親切に対して礼を言った。

次に送られてきたメイルには、全身に発疹が出て、痒くてたまらないので、病院を紹介してほしいとあった。芙美子は車を出して、グレンを皮膚科まで連れて行った。抗ヒスタミン系の注射をしてもらって、飲み薬ももらって、グレンの家まで送って行ってあげた。

そして、今度は大阪名物のお好み焼きを自分で作りたいから、材料や作り方を教えてほしいと言ってきた。芙美子は少し考えてから、グレンを家に招いて、家族と一緒にお好み焼きを焼こうと思い、家族の揃う金曜日の夕方迎えに行くと返信した。

やってきたひょろっと背の高い外国人に娘たちは緊張を隠せない様子で、顔を見合わせて、あいまいに笑っている。孝彦は落ち着いて、片言の英語を操りながら、グレンと話している。キャベツやネギを刻むところから、ホットプレートで焼くところまで、英語で説明しながら作る。娘たちはそんな母をまぶしそうに見ていた。できたてのお好み焼きをフーフーして一口たべるなり、グレンの口から「ヤミ―！」がもれた。その夜はグレンの故郷のアリゾナの話や日本とアメリカの習慣の違いなどの話題で盛り上がった。帰り際、グレンは芙美子に日本語を教えてほしいと言った。孝彦も了承したので、週二回、自宅で一時間半ほど教えることになった。芙美子は早速書店で使えそうなテキストを探し、ワークブックも購入して、教案のようなものを作り、演習用のプリントも準備した。

グレンは真面目に週二回バイクでやってきた。なかなか飲み込みは早かったが、助詞の使い分けなどにこだわった。勉強していくうちに分かってくるからと言っても、納得しないと先に進めないので、論理的に説明することが要求され、日本語を教えるのが初めての芙美子を悩ませた。とはいえ、日本語を二人で学ぶ時間は楽しい時間になっていた。孝彦にグレンの日本語について話すことも増えた。

孝彦は声を弾ませて報告する芙美子を静かに見守っていた。

日本語のレッスンを始めて三か月程経った夏の暑い日、日本語の勉強を終えたグレンを玄関まで見送りに行くとき、いきなり立ち止まったグレンに芙美子がぶつかってしまった。グレンは振り向き、芙美子を支えると、いきなり強く抱きしめた。えっ？という顔をした芙美子の唇をグレンの唇がふさいだ。と、その時突然ドアが開き、孝彦が玄関に立った。孝彦は二人の抱き合っている図を青白い顔で見つめた。口をパクパクさせている芙美子を離し、グレンは出ていこうとした。孝彦が静かに、しかし、冷たく言った。

「ドント　カム　アゲイン　ドント　タッチ　マイ　ワイフ」

グレンは振り返ることなく山下家を去った。

孝彦は芙美子に何も言わなかった。何も聞かなかった。芙美子とグレンの関係をどのようなものと思ったのかも分からないまま、そのことに触れるのはタブーとなった。それからも夫婦関係は穏やかに続いたが、芙美子は何かが変わったような気がした。孝彦の芙美子への信頼感がなくなったのか、ふっとよそよそしい空気が流れる瞬間がときどき生じた。孝彦が芙美子に何か話しかけているとき、話の途中でふいに口をつぐんでしまったり、芙美子がしゃべっているとき、顔はこちらに向けているけれど、何も聞いていないのか、急に席を立ったりした。そんなことが続くと、夫婦の会話も減っていった。

もともと孝彦は感情を表に出すようなタイプではなかったが、元教え子で年齢も十以上離れているからか、芙美子は夫から温かい目で見守られているような存在だった。だが、あの事件以来、夫の目から温かさが消えてしまったような気がしていた。それは芙美子にも何か後ろめたい気持ちがあるからかもしれないが、二人きりになると、周りの空気がひんやりとする感じがした。そんな生活を二十年以上も続けてきた芙美子はこのクルーズに何の期待もしていなかった。ただ静かに人生を終わらせたかったのだ。パーティー会場を見渡すと、様々なカップルがいるが、皆自分たち夫婦の関係よりもお互いが近くにあるような気がして、芙美子は寂しかった。夫が隣にいても、とても寂しかった。

孝彦はといえば、自分に寄り添ってくれる芙美子が愛しくてたまらなかった。教え子の時から芙美子をひとすじに愛してきた。ただ、自分でももどかしくなるくらい、愛情の表現が下手だった。一回りほど離れた妻の目が挑むように輝くとき、その丸くやわらかな体を抱き締めてやればよかったのに、孝彦はたじろぎ、うろたえることしかできなかった。不器用な夫は妻が好きなことをして、のびのびと人生が楽しめるような状況を保とうと努めてきたつもりだった。だから、グレンと玄関先で抱き合っているのを見たときは、大切な

ものが汚されてしまった思いでひたすら悲しかった。言い訳を聞いても、よけい醜い現実を見ることになりそうなので、聞くことを拒否してしまった。あの日から孝彦は妻に触れることができなくなった。依然と同じように愛しい妻なのだが、潔癖な孝彦の心のどこかに妻を許せない気持ちがくすぶっていたのも事実だ。孝彦はこのクルーズで二人の最期のときまでに、もう一度芙美子と向き合いたいと思っていた。頑なに互いの殻に入ってしまった心をどうしたら解き放つことができるのか、孝彦はまだ答えを見つけられずにいた。

山下夫婦の憂鬱をよそに、川口妙子は知的で温厚な夫に寄り添う芙美子を羨ましく感じていた。自分の夫、亮平は妙子を包み込むようなまなざしで見てくれたことなど皆無だ。妙子は深いため息を一つついた。

妙子と亮平は二人とも市役所で働いていた。亮平は仕事のできる男だった。自分がおかしいと思った案件に対しては上司にも堂々と理論的に反対意見を述べた。そんな亮平を妙子は頼もしく思った。しかし、結婚してみると、自己中心的で独善的な男だった。弱くて組しやすいと踏んだ相手に対しては容赦しなかったが、一方で、敵わない相手には平気でへつらった。そして、晩酌をしながら、妙子を前にそんな相手をののしるのだった。しかも、自分の身の回りのこと、その日着ていくシャツやネクタイ、ソックス、ハンカチにいたるまで、すべて妙子に用意させた。もちろん家事一切手伝うことなど頭にないようで、子育てにもかかわろうとはしなかった。必然的に妙子は出産と同時に市役所を辞めざるを得なかった。

亮平は四十七のとき、市会議員に立候補して当選してからは、より横柄な態度で妙子に接するようになった。何かと言えば命令口調で、逆らおうものなら、声を荒げて威圧した。妙子は奴隷のように服従を強いられる生活にずっと耐えてきたのだ。離婚も考えたが、一人息子の親権は絶対おまえに渡さない、離婚したら息子は俺が引き取ると脅された。子どものためにと踏みとどまったが、その息子も今は結婚し、父親の跡を継ぐような形で市会議員になっている。とはいえ、父とは折り合いが悪く、嫁も傲慢な義父には嫌悪感を持っているのか、ほとんど顔を見せない。孫も二人いるにはいるが、遊びに来ることはなかった。妙子は息子のために夫との生活を続けたのに、その息子にも捨てられた形になってしまい、深い寂寥感にさいなまれていた。あと何年か死ぬまで夫と二人で暮らしていくことを思うと、このまま消えてしまいたいような気持になっていたとき、亮平がこのクルーズの話を持ってきたのだ。亮平は二〇年あまり務めた市会議員を前立腺癌の治療のため、三年前に辞職してから腑抜けのようになっていた。新聞を隅から隅まで読んだ後はテレビ

三昧の日々を送っていたとき、クルーズの広告を見て、人生の最後にパーッと楽しんで、自分の人生を自分の手で終わらせる選択をしたのだ。妙子に異存はなかった。

パーティーで肉やエビを皿いっぱいにとって、ガツガツ食べる亮平を横目で見ながら、妙子はサラダを口に運ぶ。夫の健啖家ぶりを見ていると、妙子は逆に食欲を亡くし、あまり食べられないようになってしまった。小鳥が菜っ葉をついばむように、妙子はサンドイッチを少しつまんだ。

亮平は肉にかぶりつきながら、妙子がサンドイッチを食べるのを見た。妙子はいつも少ししか食べない。いつのまにか骨と皮のような女になってしまった。何もしゃべらず、何かすべてを諦めたように無気力に存在している女にしてしまったのは自分なのかと自問する。家事や育児はいつも妻任せにしていたが、要所要所ではかかわってきたつもりだ。たしかに市議になってからは、付き合いも増え、家をあけることも多かったが、専業主婦に満足していると思っていた妻から離婚を言いだされたときは驚いた。後継ぎの息子の親権云々を切り出すと、おとなしく引いたが、そのころから亮平は妙子の冷たく蔑むような視線を感じることがあった。暗い所から光る目でじっと人を観察している猫のような視線だ。自分の命がそれほど長くないと自覚した亮平は人生の最期のときぐらい仲良く終わらせたい気持ちでこの企画に参加したのだ。

パーティー会場ではあの井上夫妻がまたもめていた。亮平はお互いむきになっている二人を見て、なぜだか羨ましく思った。

圭子は夫信夫の一挙一動にいらついていた。今日の喧嘩の原因は、信夫の持ってきたスーツがドレスコードにひっかかる普段着ているヨレヨレのスーツだったことだ。急遽ショップで買ってこの場に臨んだが、見かけや世間体を無視し、平然としている様子にいつもながらいらついた。

圭子の勤める市役所に後輩として入ってきたのが信夫だった。起きたばかりの寝癖のついた頭で出勤し、まじめに仕事をこなし、昼は食べに出るのではなく、四百五十円の弁当を取って食べ終わると、机に突っ伏して、昼休みを昼寝に当てている年下の信夫を圭子はかわいいと思った。同じ班になったので、先輩としていろいろ指導しているうちに、その素直で上におもねず、ひょうひょうと生きている態度に好感を持った。圭子から積極的に信夫に近づいた。後輩をねぎらう形で何度か食事に誘った。

信夫は酒はそれほど強くなかったが、よく食べた。食べながら、市役所という組織の抱える限界や矛盾などについて怒りを込めて話した。圭子は自分もこの仕事に就いた当初は職場で自分の割り当て

分の仕事しかしようとしない人の多さや本当に人が必要な部署の人員不足、残業を強いるような圧力に戸惑ったが、二年経って、妙に職場に慣れてしまった今、信夫の怒りは新鮮で、かつ、懐かしい気がした。なだめつつ、アドバイスするのが心地よかった。二年ほど付き合って結婚した時、圭子は二十六歳、信夫は二十四歳だった。

だが、いざ結婚してみると、信夫の自堕落さが目についた。職場では班が変わったので帰宅時間は微妙にずれた。信夫は早く帰っても、スーツやシャツ、ソックスを脱ぎっぱなしにして、ゲームに熱中していた。帰宅して、その光景を目の当たりにした圭子の驚きと失望は大きかった。子どもと結婚してしまった不安とあきらめに似た感情がないまぜになって、圭子を混乱させた。

圭子が恐れたとおり、信夫は圭子が言わないと何もしない男だった。ずっと母親が世話してきたのだろうが、自分の身の回りのことさえできず、結婚したという自覚に乏しかった。圭子は信夫を教育しようとした。身の回りのことやちょっとした家事の手伝いはするようになってもらいたかったのだ。脱いだシャツやソックスは洗濯籠に入れるようになったが、ズボンのプレスは何回やっても、うまくできず、二重線をつけてしまうので、元通り圭子がやることになった。料理もカレーくらい作れると思い、任せたら、ルーを入れた後、火にかけっぱなしにしていたので、こがしてしまって、食べられたものではなかった。二人でどこかに出かけようという提案もなく、休日はゲームとアイドルのＤＶＤを見て過ごし、草食系なのか、圭子を求めることもほとんどなかった。

圭子はロうるさい母親のような存在になっていった。

信夫は自分は結婚なんて考えていなかったのに、あれよあれよという間に圭子のペースにはまって、結婚してしまったように感じていた。というのも、信夫は母親が身の回りの世話をしてくれて、仕事が終わって、家に帰ったら、おいしいご飯が待っていて、そのあとはゲームとアイドルに浸る毎日に満足していたからだ。

結婚すると、圭子はあれしろ、これしろとうるさかった。共働きだからと、料理まで押し付けてきた。圭子の期待に応えられなかったからか、三か月ほどしたら、あまりうるさく言わなくなったので、ゆっくりゲームを楽しめるようになった。ただ、圭子がいつも険のある目で自分を見つめているのが鬱陶しくて、半年もすると、自分の部屋で過ごすことが日常になった。

圭子は圭子で友達や同僚と旅行に行ったり、飲みに行ったり楽しんでいるようだった。三年経つと、お互い別々に生きているのが当たり前の夫婦になっていた。子どももできなかったので、生活の変化もなく、淡々と時を消費してきた。いっしょにいると、圭子の攻撃が始まるので、なるべく避けるように今までできたが、お互いに一

緒に生きることに疲れてしまった。何かしたいこともないし、格安クルーズを楽しんで死ぬのも一興と思い、乗り込んだが、二か月あまり海の上で妻と同室で顔を突き合わせながら過ごすことを思うと、うんざりしてしまう。

三組の夫婦はそれぞれパートナーの心に触れることを避けてきたためか、隣にいてもバラバラに違う方向を向いて立っていた。お互いに不満を抱きつつも、パーティーのゴージャスな雰囲気と出された豪華な料理に酔っていた。

翌日の午前中にカルチャー教室の説明と募集があった。各教室は二十人が定員で、受講したい場合は、個人個人が希望の教室に応募した。山下夫妻は偶然にも同じ水彩教室を選び、川口妙子と井上圭子はフラダンス、佐々木時生と小川美奈子はカラオケを選んだ。佐々木恵はヨガと書いた。そして、川口亮平と井上信夫と小川健三は意外なことに、料理教室を希望した。皆は来週から始まる教室を楽しみに解散した。

昼間のジムでは佐々木夫妻と小川夫妻が汗を流していた。恵と美奈子はジム用のスタイリッシュなスポーツウェアを身に着け、並んで、バイクを漕いでいた。互いにチラチラと相手を見ながら、少しずつ負荷をかけていく。三十分ほど漕いだ後、二人ともストレッチをする。恵は美奈子に囁くように話しかけた。

「マシーンの種類は少ないけど、バイクとウォーキングマシーンが多くていいね」

「そうね。みんな高齢者だから、マイペースで歩く有酸素運動がいいしね」

「夜、カジノに行ってみようと思うけど、ご一緒しません？　お仲間と行ったほうがおもしろいでしょ？」

「そうね。ちょっと見学に行こうかな」

美奈子はウォーキングマシーンで軽くジョギングしている健三のほうをチラッと見て、答えた。美奈子と健三は美容専門学校で知り合った。健三は美容師をめざし、美奈子はメイクと着付けのコースを取っていた。コースは違ってもいろいろなパーティーや発表会で顔を合わす機会はあった。健三は学校の中でもカットのセンスがいいと評判の学生だった。しかも、美容師にありがちなアーティストっぽい気どりもなく、地道にまじめに取り組んでいる姿に美奈子は好感を持った。美奈子の方から積極的にアプローチして、付き合いだした。卒業後、健三は三年ほど有名店で働いた後、独立して、店を構えた。それと同時に美奈子と結婚し、美奈子もメイクや着付けを必要とする客があれば、お店に顔を出した。一年後には長女が生まれ、その一年後には次女が生まれたので、美奈子は年子の子育て

に明け暮れた。

美容室は基本的に週一日月曜日しか休めない。アシスタントを四人入れているが、カットができるのは健三とベテランの女の子だけだったので、健三は休む時間も、時々昼ご飯を食べる時間もなかった。クタクタに疲れて十時過ぎに家に帰ると、娘たちの寝顔を見て、軽く晩御飯を食べて、風呂に入って寝るだけの日々だった。いつしか夫婦の寝室も別になり、会話も減っていった。

子どもの入学式や運動会、発表会も健三は行ったことがなかった。美奈子も美容関係のことには詳しいし、その忙しさや休みのなさは分かっていたが、毎回お父さんのいない運動会や発表会は寂しいものだった。世間ではたいていい週休二日で休日ともなれば、親子で出かけているのに、月曜しか休めないので泊りがけの旅行にも行けなかった。家族のために真面目に働いてくれているのはありがたいと思うのだが、夫婦関係や親子関係が希薄になりつつあるのを美奈子は実感していた。

四十を過ぎて、娘たちが家を出てからは、美奈子は一人で行動することが増えた。スポーツジムの会員になり、ジムで体を鍛えるとともに、水泳やヨガやエアロビクスを楽しんだ。海外旅行も最近はおひとり様歓迎のツアーもあるので、東南アジアをはじめ、ヨーロッパへも足を延し、いろいろな人に出会った。今でも何人かとはメイルをしあっている。初めのうちは、日々仕事に追われている夫に後ろめたい気持ちを持っていたが、妻がウツウツと家にいるよりは元気に飛び回っているほうが、健康的だと思うようになった。家にいるときは健三にやさしく接することができるようにもなったから、よかったと思っていた。

やっと二人で旅行できるのが、このクルーズなのは、少し寂しい。美容師という仕事から解放された今、これから二人でもっと楽しめるのにと思う一方で、夫とずっと顔を突き合わせる生活に不安も感じていた。健三の本音が分からない。美奈子はもう一度汗の滲んだ夫の後姿を見て、遠くなってしまった背中に答えを探すのだった。

健三は最初で最後となる優雅な休暇を楽しんでいた。独立してからは休む間もなく、人の髪を切り続けてきた。一人一人顔が違う様に、髪の質も生え方も違う。その人の髪の癖を瞬時に掴んで客の期待に沿えるようにハサミを入れる。世間話をしながら、だんだん形が決まってきて、客が満足してくれると、うれしい。任せてもらえた時は、その人の顔の形にマッチするようなスタイルを考え、提供できるのが楽しい。時にはムチャを言う客もいるが、みんなをきれいにしてあげたいという気持ちでやってきた。

子育てや家事はすっかり妻に放り投げた形になって、済まないと思っていた。家に帰ると、台所で暗い顔をした妻がうずくまってい

ることもあった。こちらの事情も分かっているだけに、それほど不満を口に出さなかったが、運動会や発表会に来ない父親を妻と娘たちはどう思っていたのだろう。臨時休業にすることもできたが、予約がすでに入っていたりして、休みは取れなかった。娘の走ったり踊ったりする姿をどれだけ見たいと思ったことか！　美奈子は次第にあきらめの境地になってしまったようで、何も言わなくなり、会話もとざえた。健三は自分がコミュニケーションをとる努力を怠ったことを後悔していた。夫婦と言っても所詮他人。互いに努力しないと崩壊してしまうものだ。娘たちが独立した後の妻の弾けようは、今までの反動のようで健三には少し痛々しく感じられた。美容師としての人生が終わった今、死に至るまでのしばらくの間、妻と一緒にゆっくりと過ごしたいと持っていた。健三は仕事をやめてからの健診で肺癌が見つかった。リンパ節にも転移しているので、手術は意味がないからと、抗癌剤治療を勧められたが、健三は抗癌剤治療を拒否した。

佐々木恵はストレッチをしている均整の取れた美奈子の体をちらっと見てから、目を健三の後姿に移した。スラリとした長身だが、ふくらはぎや二の腕には適度に筋肉がついていた。物静かでストイックな感じの横顔にゾクゾクした。恵の浮気心が膨らんできた。

恵はイタリアレストランのオーナーシェフとして、今まで頑張ってきてくれた時生のことは戦友のような気がしていた。恵自身もお店のレジを手伝ってきたし、新メニューのアイデアを出したり、試作を味見したりと二人で店をやってきたという自負があった。お店の経営は難しく、それほど利益が出るわけではなかったが、一人息子と親子三人が暮らしていけるだけの収入があった。ただ、二人ともギャンブル好きだった。若いときから時間があれば、パチンコ、競輪、競馬に通った。十年前に始めた株で、うまくいくと一度に三百万ほど入ってきた。

そんな金を貯めておいて一年に一回ラスベガスで散財するのが恒例になっていた。二人は仲良くゲームに興じるのだった。一見仲がいいのだが、二人はお互いに浮気をしていた。時生は食材を届けてくれる有機農業をしている女性と、恵は近所のジムの水泳のコーチと浮気を楽しんでいた。二人ともなんとなく相手の浮気に気づいていたが、暗黙の裡にセックスは元気の源だと相手の浮気を認めていたのだ。

お店は息子が継いでくれたので、引退したが。老人ホームに入って悠々自適に過ごすほどの資産はなかったので、ここらでパーッと有り金を使い切って終わりにしようと最終クルーズに乗り込んだのだ。

時生はウォーキングを終えて、マシーンで腹筋運動しながら、ストレッチをしている美奈子にギラギラした目を向けて、睨まれていた。時生は慌てて妻のほうを向いた。妻はふふんと笑って見せた。金を片手に二回りも離れた若い男の尻を追いかける色気婆めっと心の中で悪態をつく。俺ならいくらローレックスの時計をもらっても、あんな婆と付き合うのはごめんだがなと妻に笑顔を向けつつ、心の中で叫んだ。

夜、カジノで合流して、二組はルーレットで勝負した。ビギナーズラックで、健三が百万手に入れた一方で、佐々木夫婦は二人で五十万すってしまい、言葉もなかった。

同じころ、映画シアターでは「ローマの休日」が上映されていた。山下夫妻と川口夫妻がそろって鑑賞していた。四人とも若い頃に見たことがあったが、六十を過ぎて見ても、オードリーヘップバーンの愛らしさ、グレゴリーペックのかっこよさにうっとりし、お姫様と新聞記者の許されない恋に心をときめかせた。見終わると、四人とも少年少女のような顔になっていた。夫たちは久し振りに見る妻の笑顔に癒されていた。亮平が言う。

「古い映画もいいもんですな。今の映画はパニック映画とか気味の悪いのが多くていけませんな」

孝彦も共感する。

「そうですね。大がかりなCGを使ったハリウッド映画は大味ですからね」

芙美子も加わる。

「昔の映画って味がありますね。丁寧に作ってるからかしら」

「何か若い頃に戻ったような気がします」

妙子の声も弾んでいる。

「ほんとにね。あのころは若かったわ。どんな未来が待ってるのかしらって、夢がいっぱいあって」

「ええ、ロマンチックを夢見ていましたわ。可愛かった」

夫たちは俺は妻の夢を具現化させてやれたのかと複雑な心境にあった。

一週間ほどすると、最初の寄港地シンガポールに着いた。ほとんどのカップルは下船して、久しぶりの大地を踏みしめた。オプションでバスに乗って、市内観光ができるので、便利だと、そのバスに乗り込む乗客が多かったが、バスに乗らず、自由に港あたりを散策するカップルも何組かあった。その中に山下夫妻と井上夫妻の姿があった。芙美子は英語が話せたし、井上夫妻も市役所で語学研修を受けていたので、現地の人とコミュニケーションをとる自信があっ

たからだ。ところが、井上夫妻の英語はなかなか通じず、相手が何を言っているのかも、早すぎて全然わからないので、山下夫妻にくっついてぶらぶらすることになった。二人とも情けなそうな顔をしていたが、次第に元気を取り戻して、いつもの喧嘩しつつの道中となった。

有名なマーライオンパークから海を見ながらマリーナプロムナードを歩いた。昼はシンガポール料理と中華料理が食べられるレストランで食べることにした。孝彦と芙美子と圭子はシンガポール料理の代表とも言えるチキンライスとチリクラブとヨンタオフーという具だくさんスープなどを注文したが、信夫は水餃子と焼きそばを頼もうとした。圭子は早速クレームをつける。

「せっかくシンガポールに来たのに、どうしていつも食べてるような中華、頼むのよ？」

信夫は顔をしかめる。

「ぼくはお前と違ってデリケートな胃腸だから、普段食べつけないものを食うと腹を壊すんだよ。好きなものを頼んだらいいじゃないか」

「軟弱なんだから…。少しは冒険してみたらいいのに」

圭子は不満げだ。孝彦が割って入る。

「まあ、いいじゃないですか。食べたいものをたべたら。体の調子も大事ですからね。長旅だし」

四人は各々ジューシーな鶏肉やプリプリのカニ、野菜たっぷりのスープに舌鼓を打った。信夫の頼んだ上海焼きそばもおしいかったようだ。お腹いっぱいになった一行はエスプラネードモールで雑貨や小物を見て回った。お土産を買う必要もない旅なので、文字通りのウィンドウショッピングだが、様々なエスニックの香りのする小物たちや家具は見てるだけでも楽しかった。そのあと、クッキーミュージアムに寄って、たくさんあるクッキーの中から二缶ずつ買って、船に戻った。

船に残った佐々木夫妻はシンガポールには二回来たことがあるからということだったが、本音はカジノで使うお金を残しておきたかったのだ。時生が昼寝を楽しんでいる間、恵は閑散としたプールでのんびり体を動かしていた。ゆったりとクロールで何往復かしたら、水から上がって、長椅子に寝転んだ。そして、どうしたら健三に近づけるのか考えていた。健三はジムにはいつも美奈子と一緒に来ているし、カジノにもあまり関心はないようだ。何か自然に近づく方法はないものかと思いを巡らせているとき、カルチャー教室の申し込みで健三が料理教室と書いていたのを思い出した。恵はヨガと書いたが、マネージャーに言って料理に変更してもらおうと思いつい

た。思わずニヤリとしたとき、時生が水着姿で近づいてきた。
「ずいぶんご機嫌そうじゃないか」
恵は余裕の笑みを浮かべて言った。
「ええ、このプール、独占してるのよ。贅沢じゃない？」
「そうだな。大概の人はシンガポール観光に出かけたからな」
「ええ、シンガポールはきれいな街だけど、二度行けば、十分よ。市内観光って主なところ回るだけでしょ。お土産を買う楽しみもないしね」
「まあな。でも、寄港地でその独特の料理を楽しむのもいいかもな」
「ええ、行ったことのない場所では船を降りることにしましょう。今日は二人でプールを楽しみましょうよ」
二人はディナーの時間までプールサイドで過ごした。

ディナーには市内観光のグループも帰ってきた。自由行動を共にした山下夫妻と井上夫妻が珍しく同じテーブルにつき、その隣ではオプションツアーで一緒だった川口夫妻と小川夫妻も仲良くテーブルを囲んで座っていた。少し遅れて入ってきた佐々木夫妻は顔見知りの両グループに声をかけて、二組に近い空いているテーブルの席に着いた。市内観光した二組ともシンガポールのチキンライスを絶賛していた。日本のケチャップ味のチキンライスとは違い、鶏を柔らかく煮てから取り出し、切り分けた隣に、そのスープに生姜とにんにくを入れて炊き上げたご飯が添えられたチキンライスは恵も大好きな料理だった。恵はちょっと残念そうにつぶやいた。
「チキンライス、食べたかったな」
時生のほうをチラッと見ると、今の状況に満足している穏やかな目で恵を見ていた。恵は時生の向こうに見えている健三の済ました横顔を目にして、きっとこちらを向かせてやるとギャンブルをする時のような挑戦的な気持ちになっていた。

翌週からカルチャー教室が始まった。
水彩教室には山下夫妻の姿があった。芙美子は油絵を習っていて、絵を描くのが好きだったので、今回は洋上でスケッチなどを楽しめそうな水彩画を選んだのだ。絵に興味の無さそうな孝彦がたまたま同じ水彩画を選んだのを芙美子は意外に思っていた。孝彦はそんな妻の気持ちに気づいてか、ニコニコしながら言った。
「いろんな身近なものをよく見て描くのは対象物をめでるような気持がする。いろんな小さなものや形を慈しみたい気がするんだ。それに、君が申込用紙に水彩画って書いてるのを見たからね」
いたずらっぽく微笑む夫を芙美子は「あらっ！」というような目で見た。

各自に小さなスケッチブックと絵具、筆、筆洗いやパレットなどが配られ、初回は先生の用意してくれた玉ねぎとさつまいもとニンジンを描いた。見慣れた食材だが、いざ描くとなると、なかなか難しい。特にさつまいものでこぼこした形や質感はとらえにくくて、芙美子も苦労した。孝彦はそれぞれの野菜の形が決まらず、困っていた。芙美子は孝彦の絵を覗きに行って、思わず噴き出した。玉ねぎは球、ニンジンは二等辺三角形、さつまいもは得体のしれない生き物のように描かれていて、本来の構図では重なり合っているのに、まとまっていなかったのだ。

「おかしいな。どこが変なのかな？」と、頭をひねっている。

芙美子は笑いながら、アドバイスした。孝彦は頭をかきかき、素直にアドバイスを聞いて、手直ししていた。芙美子は自分の作品に色をつける合間に、孝彦のもとに行っては、ちょっとしたアドバイスをあげた。

出来上がった絵をお互いに見せ合って、先生からのコメントをもらった。先生は芙美子のしっかりとしたデッサン力と色の調子を褒めてくれた。芙美子ははにかみながら、うれしそうな顔を見せた。孝彦も初めて描いた絵に満足していた。芙美子は夫と同じことを楽しむ機会を持ってこなかったことに気づいた。お互いを重んじてのことだったが、やはり同じ方向を向いて何かすることの大切さを感じていた。

フラダンス教室には川口妙子と井上圭子がいた。上はTシャツだが、下はフラダンス用のギャザースカートを各自購入した。妙子が圭子を見つけて近づいてきた。

「ご一緒ですね。フラダンス、わたし初めてなんです。体が硬いから心配だわ」

「フラはわたしも初めて。普段体あんまり動かさないから太っちゃって…」

「あら、フラは少しぽっちゃりなさった方がやるほうがお似合いだと思うわ。わたしみたいにガリガリじゃ、絵にならないわ」

「そうかしら。まあこの教室にはイラつく相手もいないから、ゆっくり楽しめそうですね」

「そうそう楽しみましょう」

フラダンスは腰の振りが命だ。先生は上半身を固定して、自由自在に腰を動かせるが、高齢者の生徒たちは体全体を左右に揺らすので、体操のような動きになる。しばらくゆっくりと腰を動かす練習をしていると、みんなコツがつかめてきたのか、それなりにフラダンスっぽくなってきた。妙子も圭子もいつも使わない筋肉を一生懸命動かして汗を流している。

腰の動きに慣れてくると、先生は手の動きを説明した。フラは手でいろいろな意味を表す。ゆっくりとした滑らかな手の動きで、波や魚、夕日や別れまで表現する。ふたりは無心にゆらゆらと踊り続ける。二人とも日頃夫に何かといらだちを感じて過ごしているが、フラダンスをして、ゆったりとした音楽に合わせて、腰を振りながら、手で語りかけていると、心も体も解き放たれた感じがした。妙子と圭子は額を汗で光らせつつ、目を合わせて微笑みあった。

料理教室には男性の参加が多く、女性は四名しかいなかった。普段料理とは無縁のおじ様たちがエプロンをつけてスタンバイしている。川口亮平、井上信夫、小川健三、そして、佐々木恵の顔を見える。担当の見るからに優しげなやすえ先生は静かに四人組のグループに分かれるように言った。女性の参加者がグループリーダーになって五つのグループができた。今日のメニューは和食の定番、豆腐の味噌汁と肉じゃがだった。

恵は亮平と信夫、健三のグループリーダーになって、みんなをフォローする立場になった。とはいえ、恵は料理が得意ではなかった。夕食は時生が作ることが多かったし、休日はほとんど外食していたのだ。恵は男たち三人から頼りにされているようで、少々不安だった。やすえ先生はコツも含めて、根気よく優しく教えてくれた。まずは米を洗ったり、出汁を取ったりするところから始まった。米を洗っていて、濁った水を流し捨てる時、信夫は米粒を少し流してしまった。慌てる信夫に恵は声をかけた。

「流れた米は拾ってもう一度洗えば大丈夫よ」

ふと見ると、亮平が昆布をグツグツさせている。やすえ先生が気づいて、名札を確認しながら、注意する。

「川口さん、昆布は沸騰させてはダメだから、早く出して、かつおぶしを入れて、ひと煮立ちさせたら、火をとめてください」

「わ、わかりました」

慌てて昆布を取り出し、かつおぶしを放り込んで、煮立ったらすばやく止めた。亮平は顔を真っ赤にして先生に質問した。

「どうして昆布を沸騰させたらいけないんですか」

「昆布臭さが出てしまうんですよ。昆布は水に浸しておくだけで、おいしい出汁が出てきます。本来なら昆布は水に半時間は浸してから火にかけたいですね」

「そうなんですか」

恵はそんな亮平の様子を見て、中学生のようだとおもしろがった。

男たちは今度はじゃがいもの皮むきで悪戦苦闘している。ほとんど初めて包丁を手にした亮平と信夫は先生が丁寧に包丁の持ち方と使い方を教えてくれたにもかかわらず、親指がうまく使えず、恵は

見ていてひやひやした。
「じゃがいもはでこぼこしていて剥きにくいもんだな」
亮平の言葉に信夫が応える。
「本当に。どうも皮が厚く剥けてしまいますね。ずいぶん小さくなってしまった」
信夫のじゃがいもを笑っていた亮平が指を滑らせた。
「あっ、痛た！　親指、切っちゃったよ」
信夫が驚いて先生を呼んだ。先生は「あらあら」と言いながら、亮平のもとに駆け寄り、流水で傷口を洗ってから、傷テープを貼ってくれた。
「気を付けてくださいね。指先はよく血が出るし、痛いですからね。血が止まるまでしばらく休んでいてくださいね」
先生に傷の手当てをしてもらった亮平はいつもの横柄な態度は影をひそめ、神妙な面持ちで面目なさそうにしていた。叱られた中学生のように見えた。
健三は美容師だけあって指先が器用で、じゃがいもの皮もスルスルと剥いていた。恵は媚びを含んだ目で「お上手ですね」と声をかけた。
「妻がいないときは自分の食べるものくらいは作りますからね。カレーとかシチューとか、炒めものぐらいはできるんです」
「あら、それで…。奥様がいない時って？」
「わたしは仕事柄まとまった休みがとれませんから、妻が一人で海外旅行など楽しんでいるようです。まっ、妻が元気になれるなら、それに越したことはありません」
「お優しいんですね。奥様、お幸せだわ」
「さあ、どうでしょうか」
信夫も話に加わる。
「ほんとに女房の気持ちってよく分からないですよ。僕のやることすべて気に入らないみたいに文句ばかり」
親指を負傷した亮平は包丁は諦め、たまねぎの皮を剥きながらため息をついた。
「そういや、最近女房の笑った顔、見たことなかったからな。女房って一番近くにいるのに、火星からやってきた宇宙人のように感じることもあるよ。何なんだろうね。しかし、料理ってなかなか面倒なものですな。じゃがいもの皮一つ満足に剥けない」
恵が慰める。
「初めて包丁を握られたんでしょう？　仕方ないですよ。これからどんどん上手になりますよ。頑張りましょう」
「うん、そうだな。これからだな」
亮平は何度もうなずいた。

どのグループも料理初心者の男たちがバタバタと慌てたり、あまりの下手さに笑ったりしつつ、真剣に料理に取り組み、一時間半経った十一時半すぎには「いただきます」と言っていた。みんな自分の作った肉じゃがと味噌汁に「うまい！」を連発。多少じゃがいもが崩れていても、ニンジンが硬くても、みんな「おいしい、おいしい」とご飯もお代わりして、なごやかな昼食となった。

やすえ先生がしめくくった。

「みなさん、初めてのクッキングいかがでしたか。料理ってちょっと面倒くさいけど、一つ一つ手順を踏んでやると、じゃがいも、にんじん、玉ねぎが肉じゃがになるんです。奥様達は毎日台所に立って、皆さんのためにおいしい料理を作ってくれているんですよ。これから少しずつ腕を磨いて、奥様をびっくりさせてあげましょう。最後の授業では自分の作った料理を食べてほしい人を招待しましょうね。メニューのリクエストもしてください。さあ、食べた後は後片付けです。鍋も食器もピカピカにしてくださいね」

男たちはみんな張り切って片づけをして、先生にもお礼を言って解散となった。恵は一生懸命に料理に挑戦している亮平も時生も健三も素敵だと思った。奥様達に見せてあげたい。あなたたちのご主人がどんなにキュートか。

カラオケ教室からは元気の良い歌声が響いている。佐々木時生と小川美奈子も大きな声を出していた。ウォーミングアップのための「オーソレミオ」をみんなで歌っているのだ。そのあと、今日の課題曲「昴」の楽譜が配られた。カラオケでもよく歌われるナンバーである。まず講師である往年の歌手、山本武雄が絶妙な歌を披露し、受講生八人が一斉に拍手した。つぶやくような声を抑えた歌いだしから徐々に盛り上がるサビの朗々とした歌いっぷり、さすがにプロだとみんなが思った。

次にみんなでワンコーラス歌い、いろいろな注意をうけて、少人数でもあるので、個別にチェックをしてくれた。時生は歌いなれていてとてもうまいのだが、先生に腹から歌う様に指導されていた。時々美奈子のほうを見ては、がんばってる感じをアピールしていた。美奈子はハスキーな声で独特の「昴」を歌い上げ、みんなの拍手を誘った。ただ高音が出づらいようで、先生から、顎を引いて腹から声を出すようにとアドバイスを受けた。

たいていの人は咽で歌ってしまっていることから、先生はみんなに腹式呼吸を練習させた。腹式呼吸をしていると、体が温かくなり、汗がにじんだ。それから、フルコーラスを歌ったのだが、生徒たちは深く歌えたような気がして満足していた。最後に課題曲についてリクエストが募られ、解散となった。

帰りがけ、時生が美奈子のところに寄ってきた。
「声を出すって気持ちのいいものですね」
「内にあるものを外に出すってやはり爽快ですね。歌を歌うって体力要りますしね」
「それにしてもお上手ですね。カラオケにはよくいらっしゃるんですか」
「ええ、まあ。佐々木さんもよくいらっしゃるんでしょう？　奥様と」
「あいつと行ったら、何かわからんアイドルの歌ばっかり入れるから、うるさくてね」
「あら、いいじゃないですか。仲がよろしくて。わたしなんか主人が付き合ってくれないから、同じように暇を持て余している女友達と遊ぶしかないですもの。まっ、いいんですけどね」
「ご主人、ずっと真面目に仕事されてきたんでしょう？」
「ええ、美容師一筋」
「店の経営は大変ですよ。美容室も多いですから、競争も激しいでしょうしね」
「そうなんです。わたし、後悔しています。どうして家庭に入っちゃったんだろうって。ちょっと無理してでも主人と一緒にお店にかかわっていたらよかったって。同じ風景の中にいたら、夫婦関係も違ったものになっていたかもしれない」
「うーん、どうかな。うちはいっしょに働いていたけど…」
「仲の良いおしどり夫婦のようにお見受けしましたけど…」
「見かけはね。そうだ。今夜バーに行きませんか。ご主人も一緒に」
時生は美奈子と話すうちに、美奈子の夫への思いを垣間見て、その意外な素直さに心惹かれていた。美奈子は時折時生の目に宿る好色そうな色を不快に思いながら、自分の気持ちを吐露してしまったことに戸惑っていた。少し考えてから、返事をした。
「そうですね。主人に言ってみます」
美奈子はあまり気が進まなかったけれど、船上で長い付き合いになりそうな相手と穏やかな関係を保とうと考えて、あいまいに返事をしたのだが、部屋に帰って、夫の健三に話すと、
「バーにも行ってみたかったし、一緒に飲んでもいいんじゃない？」という言葉が返ってきた。
夜濃い紫色のカクテルドレスに着替えた美奈子は健三とバーに行った。バーには佐々木夫妻が待っていて、時生が席を立って出迎えた。
「来ていただけてうれしいです。大いに飲みましょう」
二組の夫婦は四人掛けのボックス席についた。時生が美奈子のドレスの胸元にちらりと目をやって、話し出した。

「奥さんとはカラオケ教室でご一緒しているんですけど、ハスキーな声でとても上手に歌われるのでびっくりしました」
「うちのは友達とちょくちょくカラオケに行ってるみたいですからね」
「あら、ご主人は一緒にいらっしゃらないの？」
「わたしは美容室やってるもので、なかなか時間が取れなくて…。そういえば、女房の歌声も結婚式の二次会以来、聞いていないな」
「それじゃあ、奥様はお寂しいですよね」
恵は美奈子に同情した。健三は素敵だけど、体全体から人を寄せ付けないような空気が漂っているように感じたのだ。恵は美奈子が泣き出したいのを必死に堪えている印象を持った。
「わたしも妻には申し訳ないと思っていましたが、どうしようもなかったんです。美容師辞めるわけにはいきません。お客さんもいるし、スタッフに対しても責任がある。それに、わたしには髪を切ることしかできませんからね」
諦めたような健三の言葉に恵は小川夫妻の孤独を見たようだった。そして、自分たちの生活を振り返るかのようにしゃべりだした。
「わたしたちは仕事場が一緒だったし、休日は揃ってギャンブルってことも多かったわ。だから、よく二人でいたわ。でもね、そうだからって、お互いに相手を理解して大切に思っているってわけでもないと思うの。美奈子さんのほうがご主人を強く求めているんじゃないかしら。この人、若いときからよく浮気したのよ。わたしが横にくっついてても…。どこで知り合うのかしらないけどね。癖みたいなものかしらね。途中から目くじら立てるの面倒になっちゃった」
「おいおい、そんなことまでバラすなよ」
「あら、いいじゃない？　ほんとのことなんだから。いい亭主に見られたいの？」
「おまえだってずいぶん遊んでるじゃないか。俺が知らないとでも思ってるのか」
「お互いさまよ」
場はなんだか険悪な雰囲気になってしまい、話も弾まなくなった。バーの片隅の四人はぽーっと離れて床にひっそりと影を落としていた。健三が気を取り直したように言った。
「今こうして二人でクルーズに参加していることが大切ですよ。夫婦として暮らしてきた四十年という歳月はやはり重いですよ。いろいろあったけど、ずっと一緒に生活してきたんですからね。妻のいない生活は考えられないですよ」
健三はそう言うと、そっと美奈子に目をやった。その眼差しの優しさに恵は美奈子に嫉妬すら感じた。健三は続ける。
「佐々木さんたちも仲の良い友達カップルのようにお見受けしまし

たよ。フランクになんでも話せる。いろいろな夫婦の形があっていいんですよね。お互いクルーズを楽しみましょう」

健三の言葉に現実に戻った恵は時生との生活を思った。羽振りの良かったころは毎月百万ほどの利益をあげていたレストランも最近では赤字続き。儲けた金は次々にギャンブルにつぎ込み、手元には六百万しか残らなかった。二人で老後を生きるには心細い金額だった。それで、思い切って、百万を遊ぶ金に持って、このクルーズに飛び乗ったのだ。時生も少し顔をゆがめながら、つぶやくように言った。

「そうね。うちは似たもの夫婦ですからね。無計画で気ままな…。クルーズを楽しむ…か」

気まずい憂鬱な空気の中、恵は夫の後ろをついて自室に戻り、小川夫妻も美奈子が健三に腕をからませながら、部屋に消えた。

クルーズ船は乗客の様々な発見や思惑を乗せて、スリランカのコロンボ、南アフリカのケープタウンといった寄港地を経て、順調に進んでいる。横浜港を出て、一か月になろうとしていた。

その日、映画シアターでは日本映画の「砂の器」が上映されていた。松本清張原作の重厚な映画だ。お遍路のような恰好をして物乞いをしつつ彷徨う父と子のシーンではあちらこちらからすすり泣きが漏れた。芙美子、妙子、圭子も泣きはらした目でシアターを出た。自然な流れで三組の顔見知りの夫婦はバーに流れていった。六人で座れるようにしてもらい、各々好みのカクテルを注文した。

亮平が映画の話題を切り出した。

「しかし、恨みのない人を殺してでも、隠し通したい過去、葬り去りたい記憶なんて、そうそうありませんよね」

圭子も同調する。

「殺人が明るみになったら、罪人になって人生、終わるんですものね」

信夫がポツリと言った。

「過去がバレルより殺人者になるほうを選ぶ気持ち、分かるような気がする。呪うべき過去を持たない幸せな人には到底理解できないでしょうがね」

信夫の顔からはいつもの卑屈な表情は消えて、凍り付いたような苦悩が浮かんでいた。圭子が心配して尋ねた。

「あなた、何かあったの？」

「もう忘れたと思っていた。忘れた気になっていた。嫌な体験だよ。話せば、たわいのない子どものいたずらだろうと言われるのがオチだろうけどね。僕は五年の時、父の仕事の都合で、町の学校から父の郷里の田舎の学校に転校したんだ。僕は小柄で色白で弱弱しかっ

たからか、転校したその日からいじめられた。足をかけられたり、ランドセルの中身をぶちまけられたりしたんだ。当然担任の先生に訴えたよ。ところが、先生は「田舎の子は元気だからな。早く慣れないとな」と笑って相手にしてくれなかった。子どもたちは調子づいて、次第にいじめはエスカレートし、給食に唾を吐いたり、教科書を破ったり、ランドセルの持ち手をちぎったりと、抵抗できない虫をいたぶる様に嬉々としてぼくを痛めつけた。母はあまりのことに学校に出向き、担任の先生にちぎれたランドセルを見せて、いじめの様子を報告して、何か対策を取るようにと言ったけど、担任は『子どもたちに悪気はないと思いますよ。田舎の子はまっすぐですからね。注意はしますが、信夫君のほうも強くならんとここでは生きていけませんよ』と逆にぼくに問題があるような口ぶりだったんだ。母は頭に来たようで、『先生にはこの子の心の傷が見えないんですか。いじめっ子を放っておいて、この子に変われというんですか。教育ってそんなものなんですか』って詰め寄った。すると、『お母さんが過保護に育てたから、弱い子になってしまったんではないですか』と、まるで母とぼくが悪いかのように反論したんだ。

次の日、あいつはみんなの前で『信夫をあんまりいじめるな。怖い母ちゃんが言いつけにくるからな』と笑いながら注意したから、みんな僕と母を馬鹿にしたように笑ったよ。あいつの歪んだ顔はいまでも悪夢に出てくる。放課後、いつもの悪ガキ三人につかまって、神主のいない神社に連れていかれた。『俺らのこと、先生にちくったな。懲らしめてやる』と僕を裸にして、用意していた油性のマジックペンで体中にいやらしい落書きをして、神社の木に縛り付けたんだ。胸と腹と足の部分にロープを巻かれたぼくは恥ずかしさのあまり声を出すこともできなかった。悪ガキたちは笑い声を残し、逃げ去った。一人ぽっち無残に取り残されたぼくは真っ青な空を見上げた。その無情な青さに涙が次から次へと溢れてきたよ。時々学校の生徒が通り過ぎたけど、皆蔑みの目でじろじろ見ては笑いをかみ殺して立ち去った。おしっこを垂れ流し、グッタリした僕を汚いもののようにちらりと見るだけで、誰一人助けてくれるものはいなかったんだ。

日も暮れて、蚊にさされるまま、放心状態のぼくは母とおまわりさんに見つけ出されて、ロープを解かれた。母の胸に倒れこむ僕を見たおまわりさんは『ひどいことをするもんだ。田舎の子は都会の子に引け目をもってるんかもしれんが、こんな残酷なことするなんて、かわいそうに。すまんの。すまんの』と泣いてくれた。母はぼくをきつく抱きしめて、唇を噛んでいたよ。

母は僕を風呂に入れて、落書きを消そうとしたけど、油性マジックはなかなか消えなかった。涙を流しながら一生懸命こする母にぼ

くは声をかけた。『もういいよ。おかあさん。少しずつ消えるよ』

翌日母は意を決して僕を連れて、学校に乗り込み、悪ガキ三人を捕まえると、何回もビンタを繰り返した。止めに入った担任にも往復ビンタを見舞った。すごい迫力だったよ。そして、担任に言ったんだ。『あなた、一体何を教えているの？　うちの子は脱水で死にそうになったんですよ。おとなしい転校生が殺されかけたんですよ。あなたになんか教育者の資格はないわ』ってね。それから、クラスのみんなの方に向いて、『済まして座ってるあなたたちも悪ガキと同罪だよ。信夫が木に縛られているのを見て見ぬふりしたんだから』って言い放ち、『悪魔のような子どもやその親たち、馬鹿な教師の住んでるこんな村に信夫は置いておけない！　この学校であったことは一生忘れないし、絶対許さない。あなたたちの顔、覚えたからね』と教室を一瞥し、僕の手をひっぱるように教室を出て行ったんだ。母は村を出て、ぼくを元通っていた町の学校に戻し、母と二人の生活が始まった。父はいじめの騒動のとき何をしていたのか、なぜかぼくの記憶には登場しないんだよ仕事が忙しかったのかもしれないけど、あの事件から先、父の姿はぼくの人生から消えてしまった。母子家庭となって、母はより過干渉になったきらいはあるよ。でも、それは致し方ないと思っている。

僕は元の学校に戻ったけれど、自分の感情を出せない無口な子どもになってしまった。先生に事情を話したので、クラスメートたちもよくしてくれたけど、ぼくは笑えないまま、小学校を卒業した。中学校に行くようになって、少しずつ喜怒哀楽が自然と出るようになって、ゲームを通じて友達もできたんだ。ゲームはぼくにとって現実からの逃げ場だったんだ。逃げ場がなかったら、壊れてしまっていたかもしれないよ。

あのいじめの記憶は僕の中からもあいつらの記憶の中からも消せるものなら消してしまいたい。今あいつらに会って、もしあいつらが妙な表情をしたら、恥の記憶を消すために殺してしまうかもしれないよ」

圭子は涙でぐしょぐしょになった顔で信夫を抱き締めた。信夫は子どものようにじっと圭子の腕に抱かれていた。

「絶対秘密にしておきたいことだったのに、誰にも言ったことがなかったのに、ぼく、どうしたんだろう。でも、言って、やっと過去になった気がする。聞いてくれてありがとう」

孝彦は信夫をいたわるように言った。

「長い時間かかりましたね。いじめたほうは都合よくすぐに忘れてしまうものですが、いじめられて傷ついたほうはなかなか次の一歩が出せないんですね。人間って子どもの時から弱くはかない命を攻撃する習性を持っているのかもしれませんね。理性でなんとか押さ

えているけれど…」
圭子は涙をぬぐいながら、誰にともなく尋ねた。
「いじめたほうって反省したり、自己嫌悪に陥ったりしないのかしら」
「普通はうしろめたさや罪の意識に悩むはずだけど、集団になるとそんな感覚が薄くなるんでしょう。個人対集団という図はエスカレートするものですね。動物や他人が心身ともに傷つくのを見るのに喜びを見出す類の人種もいることはいるでしょうね。病んでる大人も子どもも増えている」
孝彦の言葉に亮平も自説を述べた。
「やはり教育が大切でしょうな。家庭でのしつけ、学校での指導。この二つがグラグラしてる。今の若い親たち見てくださいよ。スマホ片手に子育てしてる。先生も訳の分からん親とその親に育てられた訳の分からん子どもたちへの対応で疲れ切ってる。それもあってか、教育はどんどんネット依存してきて、小学校も通信制の学校が半数を超えてるようですよ。人と人とのかかわりがどんどん希薄になってきている。親子関係も師弟関係も友達関係も形だけの表面的なつながりでしかなくなってきたんじゃないかな。わしらが学生の頃は、もっと心の交流がありましたよね。ぶつかることもいっぱいあったけど…」

亮平の言葉に、孝彦の意識は自分の教員時代に遡った。そして、忘れてしまったはずの自分の罪をはっきりと思い出した。あれは孝彦がテニスの顧問をしていたころのことだ。芙美子から何通も手紙を受け取っているうちに、孝彦も芙美子のことを異性として愛し始めたときだった。夏の大会も終わり、三年生はそろそろ引退して、大学受験に集中する九月の初めだった。練習の終わったコートには三年の男子キャプテン、斎藤優が残っていた。優は部員が誰もいなくなると、思いつめたような顔で孝彦に近づき、一通の手紙を差し出した。いぶかる孝彦に優は言った。
「僕はもう引退して、クラブやコートで後輩とも会う機会がなくなります。今日彼女に渡そうと思っていたのですが、チャンスがありませんでした。この手紙、二年生の芙美子さんに渡してもらえませんか」
孝彦は優の懇願するような目を見て言った。
「自分で渡したほうがいいんじゃないか？」
「呼び出したり、二年生の教室まで行ったりすると、彼女の迷惑になりそうで…。きょうは最後のチャンスだったのに。本当は自分で渡したかったんですけど、勇気がありませんでした」
「分かった。必ず渡しておくよ」

手紙を預かったものの、若い孝彦の心は揺れた。優はキャプテンとしてみんなをまとめてくれた。責任感も強く、みんなの信頼も厚かった。テニスのプレーを見ても、自分の感情をコントロールし、相手の動きを予測し、絶妙な球を打つ頭脳的な動きができるプレーヤーだった。短髪で日に焼けて引き締まった体はエネルギーに満ちている。孝彦は芙美子が取られるんじゃないかと不安になって、思わず手紙を読んでしまった。そこには後輩としてテニス部に入ってきた芙美子に対する思いが、出会いから練習を通じて募ってくる好意が、率直につづられていた。最後にはメイルアドレスがあって、返事を待つ旨が記されていた。孝彦はそのまっすぐさに負けたと思った。無意識に手紙を握りつぶしていた。結局芙美子には渡さずじまいだった。数日後、答えを待つ優が耐え切れず、孝彦のところにやってきたとき、孝彦は嘘をついた。

「一応渡したけど、芙美子には他に好きな人がいるみたいだったよ」

優はがっくりと肩を落とし「すみませんでした」と言って去って行った。

このことは誰にも言ったことがないし、これからも言うことはあるまいと孝彦は思う。己の恥ずべき卑怯なこの行為は口が裂けても言えない秘密だ。孝彦が苦い思い出をかみしめていると、芙美子がちらっと孝彦に目をやりながら言った。

「だれでも一つや二つは隠しておきたい秘密を持っているのかもしれませんね。長い間生きてきましたものね」

「そうですね。その秘密は吐き出したほうが前に進める場合もありますけれど、しゃべると、いままで築き上げてきたものが壊れてしまう場合もありますものね。墓場まで持っていかなきゃならない」

妙子が低い声でそういうと、亮平は「えっ？」というような顔で妙子を見た。妙子は墓場まで持っていくつもりの秘密に思いをはせていた。

夫の亮平は四十を過ぎてから、市役所をやめて、市会議員になると言い出した。何か彼なりに期するところがあったのだろうが、市役所を勤め上げると思っていた妙子は戸惑った。しかし、言い出したらきかない亮平は仲間とどんどん準備を進め始めたので、仕方なく妙子も選挙運動を手伝うことになった。そのころの妙子は今のようにガリガリではなく、ほっそりとした美人だったので、応援のため、事務所に顔を出すと、周りが華やいだものだ。選挙運動には有力なサポーターが不可欠なので、妙子は亮平と一緒に力のある人物のところに出向いて、応援を頼む日が続いた。何回か顔を出していると、お互いに気心も知れてくる。その中の一人がある日突然自宅を訪ねてきた。亮平はあいにく事務所に詰めていたので、妙子が応対した。彼は手土産を渡すと、大きな体をソファーに沈め、自分の

事業の苦労話等したあとで、妙子の顔をまじまじと見つめ、こう言った。

「不動産組合をあげて応援させてもらう心づもりはあるんですよ。ただ、それは奥さん次第というか…」

と言うと、いきなり妙子の手を握った。

「わしゃ、あんたが挨拶に来てから、あんたが夢に出てくるようになった。話しぶりは控えめだが、きちっと相手の話を聞いて、的確に応える、頭のよさにも感心した。亮平なんかにはもったいない女だ。あんたが「うん」と言ってくれたら、選挙応援は惜しまん。男に二言はない」

真剣な顔をして詰め寄る男に妙子は逆らえなかった。後日ホテルの部屋を訪ねた妙子は男にされるがままになりながら、その情熱を楽しんでいる自分に驚いていた。なにもかもが現実でないような出来事だった。自分の意志というよりも何かにつき動かされるようにホテルに来て、夫以外の男に体を開いてしまった自分の行動が信じられなかった。男は妙子に約束した通り、幾つもの組合を動かし、亮平の応援をしてくれた。そのおかげで、亮平は初出馬で当選することができた。

その男は当選の知らせにお祝いに駆けつけてくれた時、妙子と顔を合わせたが、うなずいただけで二度と妙子に近づくことはなかった。妙子は期待を裏切られたようで少し落ち込んでいる自分をひどく恥じた。この夫を裏切った事実を妙子は誰にも漏らすことなく、相手も硬く口を閉ざしたまま二十年経った。

遠くを見るような妙子の横顔をそっと盗み見だ亮平は妻のひとみが一瞬艶っぽく輝くのを見た。

「おやおや、皆さん何か秘密をお持ちのようですけど、墓場まで持っていかれますか」

信夫がいたずらっぽく笑っている。芙美子が一声。

「詮索はやめましょう。ダンスが始まりましたわ。ダンスはいかが？」

「ダンスなんてしたことがない」と渋る男たちに「二人くっついて、ユラユラしてればいいのよ」と圭子が信夫の手をとって、立ち上がり、肩に手をおいてユラユラしている。芙美子も妙子も夫の手を取って、ユラユラ踊り始めた。三組ともしあわせそうな顔をしていつまでもダンスを続けていた。

船は南アフリカを回って、南米をめざし、順調に走っていた。乗客は船上での生活にも慣れ、それぞれ自分に合った時間を過ごしていた。昼間はデッキでゆったりと読書する人や昼寝を楽しむ人、また、ジムやプールで軽く体を鍛える人、夜になると、カジノで遊ぶ

人や映画を楽しむ人など、各々が自分のペースでくつろいでいた。
カルチャー教室もメンバーが決まっているので、和気あいあいとした雰囲気で進められていた。
天気の良いデッキにはスケッチブックを広げて、船内から海上を眺めるような構図で絵を描いているグループがいた。水彩画教室のメンバーだ。静物画を卒業して、風景スケッチに挑戦しているのだ。山下夫妻は少し離れたところに座って、ペンを動かしている。時々行き来して何かしゃべっている。芙美子の鋭い指摘に孝彦が渋い表情を作るときもあるが、二人の横顔には笑みがこぼれていた。
フラダンスの教室では腰や手の基本的な動きをマスターした生徒が曲に合わせて踊っていた。流れるような動きは心もリラックスさせるのか、生徒たちはみんな穏やかな表情でゆったりと泳いでいるようだ。圭子と妙子は並んで踊っている。圭子は腰のあたりの贅肉が少しすっきりしたようだ。一方、妙子は少々ふっくらして血色もよく若返ったように見える。レッスンの最終日にはゲストを招待して発表会をすると聞かされて、生徒たちの練習にも力が入っていた。
料理教室からは空揚げを揚げる香ばしいにおいが漂ってきた。酢豚の甘酸っぱい香りも食欲をそそる。恵は亮平、信夫、健三の指導に大忙しだった。三人とも包丁さばきはだんだん上達しているのだが、料理の常識に欠けているところがある。亮平は干ししいたけを戻さず調理しようとし、健三は酢豚の豚肉を揚げずに炒めようとし、信夫はとろみ用の片栗粉を粉のまま振りかけようとし、恵を慌てさせた。三人に仕事をうまく振り分けるのも恵の仕事だったので、健三に色目を使っている余裕もなく、三人の男たちの様子を見ながら、てきぱきと指示を出した。三人の男たちはいつしか指導者である恵を尊敬のまなざしで見ているのだった。クラスで行われる最終レッスンの昼食会のためのメニューをみんなに募ったところ、男たちは自分の妻の好物に考えを巡らし、ちらしずしと茶碗蒸しとエビのてんぷらをあげた。男たちは皆はりきっていた。
カラオケ教室からはいつものように元気な歌声が響いてくる。今日は美奈子のリクエストした「シルエットロマンス」の練習が続いている。毎回複式呼吸のトレーニングを取り入れているので、みんな腹から声を出せるようになってきて、厚みのあるコーラスになっていた。ここでも一人一曲、最後に歌声を披露することになった。授業が終わると、皆口々に隣の人と何を歌うか話していた。時生も美奈子に尋ねた。
「美奈子さんは何を歌うんですか」
「そうねえ、高橋真梨子の曲にしようかな。佐々木さんは？」
「僕はイエローモンキーのナンバーにするよ」
「あら、懐かしいわ。わたし、大ファンだったんですよ。高校生の

時だったかな。彼らのライブに行ったことがあるわ。彼らがステージに現れると涙が出ちゃった」
「ロックもお好きなんですね」
「ええ、母の持ってたツェッペリンやボウイのＬＰもよく聞いたわ。結婚前は主人と知り合いのインディーズのバンドのライブをライブハウスに聞きに行ったわ。音はそんなによくなかったけど、熱気でムンムンしてて…。若かったな」
「ご主人と二人でですか」
「ええ、彼はフォークのほうが好きみたいだけど。小田和正とか財津和夫とかね。コンサートにも行ったな」
「美奈子さんはご主人一筋なんですね」
「彼は美容師として、素晴らしい腕を持ってるし、一人でよく戦ってきたと思う。彼の真面目さと努力は分かっているの。私は一人で寂しかったけどね。このクルーズでいろんな日々の雑用から解放されて、主人との時間を持つことができてよかったと思ってるわ。佐々木さんは？」
「僕たち夫婦は友達みたいっていうか、もっと乾いた関係のような気がする。妻に対してはあまり女を感じていないかもしれない。何考えてるのかも何してほしいかもすぐ分かるんですよ。まあ、二人ともはっきり口に出すタイプかな」
時生はそういいながら、夫を一途に思う美奈子をいじらしいと思った。強く心惹かれるものがあるが、叶わぬ思いとあきらめの吐息を漏らし、目を伏せた美奈子の長い睫毛を見つめた。

クルーズ船は三月に入り、ブラジルのリオデジャネイロに立ち寄った。世界的に有名なリオのカーニバルのサンバパレードを見るオプションツアーが組まれていて、五組の夫婦もサンボドロモの会場に向かった。どこもかしこも人であふれ、サンバのリズムが聴衆の気持ちを高めた。サンボドロモは八万人収容できる会場で十一時間に渡ってサンバパレードのコンテストが行われる。
まず、コミッサンデフレンチと呼ばれる先頭集団が華やかなコスチュームを付け、寸劇を演じながら通り、次はポルタバンデイラという女性旗手を擁した電飾などで飾られたフロート車が現れ、そのあとにはアーラダスバイアーナスという百人以上の女性の踊り手たちの集団が続いた。無支や動物や鳥、花をかたどった奇抜な衣装を身に着けた各々のグループが、その物語性とサンバの踊りを競い合うのだ。クルーズの面々は穏やかな日常とはかけ離れた、その圧倒的なパワーに目を見張っている。惜しげもなく肌を曝し、汗を光らせ、エネルギッシュに踊りに没頭する人々はとても美しかった。度肝を抜かれたおとなしい日本人たちは互いに顔を見合わせ、うなず

きあって感動を分かち合った。パレードは長時間朝まで続いたが、みんな飽きることなくサンバの醍醐味を堪能していた。
そろそろ帰ろうとみんなが立ち上がった時、佐々木夫妻がみんなの前に立った。
「僕たち、ここでさよならします」
「えっ？　どういうこと？」と戸惑う仲間に
「このリオデジャネイロでクルーズ船から降りて、逃げます」
「つまり、イースター島で安楽死しないということ？」
「そう」
「でも、あと五百万のペナルティーを払えば、安楽死しないで日本に戻れるんでしょ？　何も逃げなくても、こんな南半球の見知らぬ土地で」
「僕たち、ペナルティーに払う金なんてないんですよ。なけなしの金を全部使って乗船したから」
「マネージャーに相談したらどうだね。違法滞在になってしまうだろう？」
「例外を認めたら、この企画は成り立たなくなると思いますよ。クルーズ楽しかったです。みなさんと出会えてよかった」
恵も少し涙声になりながら言った。
「料理教室も楽しかったわ。ご主人たち、奥さんを喜ばせようと頑張っていらっしゃったんですよ。お見せしたかったわ」
「僕たちもう少し夫婦で生きていたいと思います。もっと濃密な二人の時間が持ちたい。みなさんもこのまま安楽死していいんですか。みんなお元気じゃないですか。リタイアしてこれからですよ。死に急ぐことはない。いつでも死ねる。ここまで連れ添ってきた夫婦です。お互い寄り添って天寿を全うするのもいいんじゃないですか」
「何か当てはあるんですか。この土地に」
「何もないです。でも、人生はギャンブルですから。僕たちはギャンブル好きな夫婦ですよ。ご存知でしょ？」
そういうと、二人は軽くウィンクして、まだサンバの音が響いているリオの人混みの中に消えていった。残された四組はしばらく呆然と二人の消えた人混みを見ていた。
「逃げたか。おもしろい」
健三はポツリと言った。

残された四組の夫婦は否応なくクルーズの終着点を選ばなければならない時期に来ていた。
山下夫妻は部屋で静かに対峙していた。芙美子が口を開いた。
「あなたの死ぬ覚悟は変わらないんでしょう？　生き続けるのが不安なのね。お父様のこともあるし」

「そうなんだ。君は気付いているかい？　私の記憶があいまいになっているのに」
「最近いろんなところにメモが貼り付けられてるから。でも、わたしから見ると、あなたはまだまだしっかりしていてるわ。あなた程度の物忘れなんて、わたし、しょっちゅうするわ。気にしすぎるのよ」
「そうかもしれないけど、もう七十四なんだ。年々老化は進む。逆らえないよ。でも、君はまだ若いし、わたしに付き合うことはない」
「私は高校生の時からずっとあなたと一緒に生きてきたのよ。一緒に死んでくれって言ったらいいじゃない」
「君の人生だよ。わたしが指図できることじゃない。君が…」
「どうしていつも先生でいようとするのよ。かっこつけなくてもいいのよ。夫婦でしょ？　一人で死ぬの怖いくせに。弱虫のくせに、冷静なふりをして！」
芙美子は泣いて怒っている。孝彦は面食らいながら、恐る恐る芙美子を抱いた。芙美子は強く孝彦を抱き締めて言った。
「グレンのことだって、何にもなかったのよ。あの日急にキスしてきたの。どうして何も聞いてくれなかったのよ。ずっと拘ってたくせに。意気地なし！」
芙美子は涙でぬれた目を上げて、孝彦を睨みつけた。
「ごめん。ごめんな」
孝彦はか細い妻を抱き締めて言った。
「一緒に死んでくれ」
「いいわよ」
芙美子は泣き笑いした。
日のすっかり落ちたデッキでは井上夫妻が果てしなく続く暗い海を眺めていた。
「佐々木さんたち元気でいるかしら」
「さあ…。リオデジャネイロって馴染みがないからね。言葉も英語じゃないよね。スペイン語かな。でも、あの二人、生命力ありそうだから」
「そうね。何とか生き延びてほしいわ。新天地で」
「うん。ぼくらはどうする？」
「私はもう少し生きたくなってきたわ。あなたと」
「そうか」
「わたし、あなたにとって、ずっといじめっ子だったのじゃないかなって思う。結婚する前は姉か母親のような目線であなたを見てたのに、結婚した途端、同級生のいじめっ子になっちゃった」
「僕はいじめられてるって感覚はなかったな。母親にうるさく小言を言われてる感じかな。うちの母親は基本的には僕にとても甘かっ

たけど、人並みに口うるさかったからね。その延長みたいな感覚かな。少々面倒くさいけど、妙に安心できる環境っていうのかな。それで、自分自身成長するのを怠けちゃったのかもしれない。やっぱり甘えていたんだろうね」

「じゃ、これからパートナーとして、もう少し一緒に生きてみるってのはどう？　あなたの作る料理も食べてみたいわ」

「僕の料理のセンス、なかなかのものだよ」

薄暗いバーでは小川夫妻がスローな曲に合わせて、ダンスをしていた。美奈子は目を閉じて、健三にリードされている。右へ左へ揺れながら、時々目を開け、夫に二言三言話しかけては、また目を閉じて夫に身を任せている。二人の存在する空間は、そこだけ切り取られたように濃密な空気を漂わせていた。だれにも邪魔されない永遠に続く時間に二人は遊んでいた。

バーの奥のカウンターには川口夫妻が腰を掛けて、ダンスを続ける二人を見ていた。

「仲がよろしいのね。素敵なカップルだわ」

妙子がジンライムを飲み乾した。

「おまえ、酒が飲めたのか」

「勤めていたときは飲み会やらでよく飲みましたよ。あなたも一緒の時があったでしょ？」

「そうだったかな。あっ、そうだ、思い出したよ。飲み会があると、お前の周りには若い男たちが集まってたな。おまえ、きれいだったから、恋のライバルが多くてなかなか大変だったよ」

「あら、そうだったの」

「おまえは無駄口を叩かずにしっかりと仕事をしていた。電話も嫌がらないで取って、うまく処理していた。みんな見るとこ見てるさ。嫁にするならこんな子だって、同じ班の若いやつらが狙ってたんだ。中には電話に絶対出ないやつとか、自分の仕事を消化できずにいつも人に頼ってるやつとか、自分の持ち分しかしようとしないやつとかいっぱいいたからね。仕事適当で遊ぶことばかり考えてる」

「そういえば、皆さんよく遊んでらしたわね。飲み会、バーベキュー、例会。飲み会の会場もホテル使ってリッチだったわ」

「仕事もそこそこに有給取って海外旅行行って、ブランドものを買いあさり、どこのお店がおいしいという評判を耳にしたら、ほいほい出かけていく。結婚して地道に暮らすことなんて頭にない。市の職員の三分の二は腐ってる。やつらにとって、何もしない市長がいい市長なんだ。だから、ほら、違う政党の若手が市長に当選した時があったろう？」

「ええ、市民はみんな期待しましたわ」

「市長がやる気になって市の古いシステムを改革しようとしたんだ。

でも、市役所の人間は全然協力しようとせず、逆に足を引っ張ることしか考えなかった」
「とうしてそんなことを？」
「ルーチーンの仕事してたら一定の給料が入ってくるんだよ。新しいプラスアルファの仕事なんかしたいわけがないじゃないか。あいつらはいかに働かずに給料もらうかってことしか考えてないんだよ。で、やる気のある市長を引きずり降ろしてしまった。俺は嫌気がさしたんだ」
「それで、市議に？」
「そう。でも、昔からのしがらみって言うか、土地のカラーっていうのか、新しい取り組みを提案しても、ことごとく反対されて、結局何もできずじまいさ。俺に賛同してくれる人もいたが、大きな力にはならなかった。思うようにいかないことばかりで、おまえにも辛く当たったな」
「ご苦労あったんですね。いろいろもっと話してくだされば良かったのに」
「話せば、愚痴になる。おまえは愚痴を聞くのは嫌だろう？」
亮平は妙子の目を覗いた。妙子は夫の愚痴に嫌な顔をした自分を思い出していた。夫は気付いていたんだと妙子は自分の無神経を後悔していた。
「あなた…。わたしたち、どうしますか？」
「俺は癌だしな」
「前立腺の癌は放っておいても、すぐにはどうこうないんじゃないですか」
「いろいろ言う人がいて、本当のところは分からんよ。おれはもう思い残すことはない。でも、おまえまで死ぬことはないんじゃないか？　おまえは元気なんだから。おまえ一人くらい悠々自適に暮らせる蓄えはあるよ」
「ありがとう。でも、水臭いこと言わないで。死ぬときは一緒ですよ」

クルーズ船ではしばらく行方不明になった佐々木夫妻のことが話題になっていたが、一週間ほどしたら、また元の平和な空気が戻ってきた。イースター島まで三週間を切っていた。
たそがれ時のデッキでは四組の夫婦が海を見つめ、佇んでいた。各々が佐々木夫妻から投げかけられた言葉を反芻していた。亮平が尋ねる。
「みなさんはこのクルーズの趣旨通り、安楽死されるのですか」
健三は美奈子を見ながら答えた。
「今やっと妻と向き合えてる気がします。自分の病気のこともあっ

て、死ぬつもりで参加しましたけど、積極的に治療も受けて、もう少し妻と同じ風景を見て暮らしたいと思います」

圭子も信夫の手に自分の手を重ねた。

「この人がわたしと一緒になったのは年上で先輩のわたしに母性を求めたのだと分かりました。遅くなりましたけど、お迎えが来るまで、夫の心に寄り添っていきたいと思います。二人でもっと人生楽しみたいですもの」

孝彦は苦渋を滲ませながら語った。

「妻とも話し合ったのですが、わたしたちは予定通り死を選ぼうとおもっています。わたしは生き過ぎるのが怖いんです。自分が自分でなくなってしまう前に自分の手で終わらせたいんです。わたしの父も私同様、長い間校長をしていました。それが、退職して二年すると、認知症を発症しました。あんなに堂々と威厳があってみんなに尊敬されていた優しい父が壊れていく様を毎日見ていました。腑抜けたようにぽーっとしていてるかと思ったら、餓鬼のように喰らい、糞尿をこね回す卑しく醜い親を介護するのは本当につらいものでした。赤ちゃん返りするようだとよく言われますが、そんなものじゃない。もっと邪悪な心が見え隠れするように思えるのです。もしかしたら、父の本性が下劣なのかと誤解してしまう。頭ではそうじゃないことは分かっているのですが。本人には何の罪もないのです。哀れでした。最後には施設に入ってもらいました。わたしも妻も限界でしたから。わたしはあんなふうに終わりたくないんです。父を見ていただけに、自分もあさましい姿になって家族を悲しませるんじゃないかと不安なんです。ひきょうかもしれませんが、わたしは自分の醜い姿をさらしたくない。このクルーズに参加して、いろいろな夫婦の形に触れることができました。みなさんの本当の声を聞かせてもらえました。うれしかったです。妻との距離も近づいたように感じています。わたしは妻との充実した思い出を胸に、静かに逝きたいと思います」

芙美子は少し笑った。

「わたしはやりたいこと、やるべきことは大概やれたと思っていますから、いつ死んでもいいんです。能力が足りなかったり、状況が許さなかったりでできなかったこともありますが、仕方ないです。この人は実は小心者で、ええかっこしいなんです。だからわたしが一緒でないとね。死ぬことを選ぶのは人間の権利だと思います。その権利を行使できることを幸せに思います。皆さんとご一緒できてよかったです。ありがとうございました」

亮平は感心したようにつぶやいた。

「潔いのですね。うちはどうするかな」

妙子のほうを見ると、「まだ時間はありますよ」と微笑んだ。

イースター島到着一週間前になると、カルチャー教室の発表が続いた。

カラオケ教室では美奈子の歌声にじっと耳を傾ける健三の姿が見られ、フラダンス発表会では亮平と信夫が照れくさそうに妻たちのダンスに拍手を送っていた。料理教室を見学していた妙子と圭子と美奈子は夫たちが出汁を取り、具材を切って煮たり、天ぷらを揚げるさまを目を丸くして見ていた。昼食会では妻たちが料理を口に運ぶのを真剣な表情で見守っていた夫たちが、妻が一言「おいしい」と言うと、子どものように喜んでいた。

亮平が独り言を言った。

「こいつの笑う顔をもっと見てみたいな」

イースター島に着くと、山下夫妻は川口夫妻、井上夫妻、小川夫妻に見送られ、さわやかな笑顔を残して、旅立った。散骨は三組の夫婦によってなされた。二人の骨はさらさらと風に流されて、青い異国の海に吸い込まれていった。

結局安楽死を選んだのは五十組中二十三組で、半数の夫婦はペナルティーを支払って生き残ることを選んだ。この格安クルーズは以後四回行われたが、安楽死に至るカップルが半数から三分の一ほどしかなく、クルーズの目的が成就されていないということで、早々に中止となった。

ただ、よく似た企画は他国でも始まった。お隣の大国、C国でも「夢クルーズ」と銘打ったツアーが人気を博していた。このクルーズ、六十歳以上のカップルならただで参加できた。しかも、後に残されたこどもには報奨金が与えられた。子どもたちは躍起になって親をクルーズに乗せようとした。ただし、このクルーズ、出発して一週間以内にパーティー会場に集められた乗客は何の予告もなく、ある種のガスで百パーセント、安楽死することになっていた。例外はなかった。死体は即海に捨てられ、海の生き物たちの餌に消えた。当局はこの強制的な安楽死を否定し、情報規制を行っているらしい。さすがC国である。

〈了〉